

「死」からの連想語のKJ法による分類^{1・2)}

—死生観の構造の検討—

丹 下 智香子³⁾

I 問題と目的

心理学の分野で一般的な人々の死に対する態度を測定した研究は、主に「死に対する恐怖（もしくは不安）」を「自然で普通の人間の経験の重要な特徴」(Florian & Kravetz, 1983) として扱うことが多かった。その中では、死に対する恐怖を多次元的に測定する尺度も多数作成されており、死のどのような側面が恐れられているのかといったことや、どういった属性や特性を持つ人が死のどのような側面を恐れるのか、といったことも検討されている (Collett & Lester, 1969; Durlak & Kass, 1981-1982; Florian & Kravetz, 1983; Hoelter, 1979; Sharma, Monsen, & Gary, 1996-1997; Thorson & Powell, 1993など)。しかし、死に対する不安は死を取り巻く信念体系の一部にすぎず、それだけでは全体的な死の態度構造が把握できない（金児, 1994）という指摘もなされている。近年では死に対する態度を、「生」の主題や死が持つ意味、死後観といった死と切り離して考えることのできない部分も含めて多面的にとらえた研究(丹下, 1999) や、死の受容という観点も含めて扱う研究(Gesser, Wong, & Reker, 1987-1988; 河合・下仲・中里, 1996) なども行なわれるようになってきた。これらの先行研究は、それぞれの領域において有用な知見を得ていると思われるが、その反面、尺度評定法を用いた調査では、研究者が想定した範囲内でしか回答が得られないという制限もある。その結果として、個々の研究から得られた知見は増えつつあるものの、「死生観」の全体的な構造については十分に検討してきたとは言い難い。

-
- 1) グループKJ法および評定に協力してくださった木野和代氏、久木山健一氏、山内保典氏、青木直子氏に深く感謝いたします。
 - 2) 本研究は日本心理学会第66回大会（2002）の発表に加筆修正したものである。
 - 3) 名古屋大学大学院教育発達科学研究生

これに対して、より制限の少ない手法を用いて死生観の一部に焦点づける、多様なアプローチが編み出されてきた。Neimeyer, Fontana, & Gold (1983) が作成した死に関する構成概念の内容分析のためのコード化マニュアルを用いて、Holcomb, Neimeyer, & Moore (1993) は個人にとっての死の意味の分析を行なった。そして、死の意味としては、死の有意義性、存在の継続否定的な情緒の状態、非存在（終結性）、肯定的な評価、といった反応が多いという結果を得た。さらに、「大学生標本の年齢が限定されていたため」年齢に関する差異を得ていないものの、死の個人的な意味には性別や個人の健康状態、自殺に関する経験、死に関する個人的な哲学などによる差があることを見出した。Wenestam & Wass (1987) はアメリカとスウェーデン国籍の4歳から19歳の子どもを対象に、「死」や「死んだ」という語を聞いたときに思い浮かんだ事柄を描写する絵（およびそれを説明するコメント）を描かせ、その質的な類似点や差異点に着目して質的に異なるカテゴリに分類した（表1）。そして文化間での比較を行なったところ、絵の質に関しては類似性が認められたにもかかわらず、各カテゴリの絵を描いた子どもの頻度や強調点に差異を見出した。それによると、B2（『文化的・宗教的な慣習・シンボル』で、死者が描かれないもの）の絵はスウェーデンの子どもに多く、死の外的な原因の描写であるC2やC1の絵はアメリカの子どもに多かった。さらに、発達に伴う差を検討し、各カテゴリの絵を描いた子どもの平均年齢に有意差があることを報告している。すなわち、年少児においては事故や暴力といった原因、棺や墓地の中に見える死体などの、未熟な死の描写がなされる。年中児においては情緒、死後の世界に対するキリスト教的な信念、文化的・宗教的慣習やシンボルが提示される。そして年長児においては擬人化、死の状態の象徴、新たな始まりとしての死といった、死の性質や本質の描写がなされる、という形で発達に伴い子どもの死の概念が変化するということが示された。宮本（1983）は子どもが「死」という言葉を聞いて思い浮かべる言葉から彼らの

「死」からの連想語の KJ 法による分類

表1 子どもの死に関する考え方

カテゴリ	絵の内容
A : 反復的	「死」, 「死んだ」という言葉を反復する説明の形で、誰かの死を描写。
B : 文化的・宗教的な慣習・シンボル	墓場、教会、棺、墓、墓跡、十字架の描写、葬儀や追悼式の描写。 B1 : 死亡した人が中に存在する棺、墓、墓場、葬式などを描写。 B2 : 死者が描かれない。
C : 原因	死の外的な原因を描写。 C1 : 火事、自動車事故、蛇による咬傷などによって人が殺されるという出来事を描写。 C2 : 銃撃、死傷事件、戦争といった暴力的な行為による死を描写。
D : 死後の世界のキリスト教的概念	神、裁き、天国、天使、悪魔、地獄などのキリスト教的な死後の世界に関する概念を描写。
E : 情緒	情緒的な危機の状態にある人を描写。悲しみ、不安、恐怖など。
F : 死の性質	死の性質もしくは本質を描写。抽象概念を扱う。 F1 : 死神のような具体的な表現、もしくは同様の死の擬人化を描写。 F2 : 絵の意味を説明する言語的なコメント付きで、死の抽象的な象徴を描写。ポジティブな象徴はやすらぎ、落ち着き、自由、魂の調和、光など。ネガティブな象徴は顕著な QOL の欠如、空虚、無、暗黒など。 F3 : 死が新たな人生の出発点で、故人の、そして時には残された者の新たな始まりへの移行であるという概念を描写。

注 : Wenestam & Wass (1987) をもとに作表。

表2 子どもたちの持つ死のイメージ

項目	連想語の例
感情の連想	恐怖感情 こわい、恐ろしい
	悲哀感情 悲しい、淋しい
	嫌悪感情 いやだ、きらい
	同情感情 かわいそう、つらい
	苦痛感情 楽だ、苦しい、痛い
事柄・事物の連想	事故、事件 交通事故、殺人
	葬儀 葬式、大葬場
	生命 命、寿命、長生き
	死後 天国、あの世、お化け
	人間 父、母、ジョン・レノン
	存在 無、消える、永遠の別れ
	病気 病気、血、手術
	運命 運命、当然、まぬがれないこと
	感覚 冷たい、暗い、青い
	その他 受験、冬、弱者

注 : 宮本 (1983) をもとに作表。

持つ死のイメージを捉えようとして、小学校 4 年生から中学校 3 年生を対象に連想語を調査し、表 2 に示すような項目に分類した。そして、全体としては「感情の連想をしたものと、事柄や事物の連想をしたもののは相半ばする」が、「小学生のほうが中学生より死のイメージは感情的であり、中学生では即物的になる」ことを報告している。さらに、この宮本の分類基準を参考にして、青年および成人の「死」という語からの連想語を検討した研

究 (丹下, 1998) では、発達に伴い人々の「死」という語からの連想には方向性と領域の幅に関して変化が生じ、多面的な視点がとられるようになるということが報告されている。Noppe & Noppe (1997) は死に対する態度や考えについて自由記述と面接を用いて得られた反応を質的に分析した結果、青年期の前期・中期・後期においてはそれぞれの発達課題を反映して死の概念や態度に違いがあることを報告している。

このように、より制限の少ない手法を用いて行なわれた研究からは「死生観」として多様な側面および構造がそれぞれ見出されている。これらの研究間での知見の差異はデータ収集の手法や分析の際の観点の違いなどに由来すると思われるが、その差異こそが尺度評定法を用いた研究が扱ってきた領域よりも広範囲を扱うことが可能であることを意味するといえるだろう。また、これらの研究からは、尺度評定法を用いた研究の知見と同様に、死生観には個人の属性や特性による差、発達に伴う差、文化差などが存在することが示唆されている。量的な差異を扱う際により有効な尺度評定法による研究と、質的な差異を扱う際により有効なこれらの手法を用いた研究は、両者の知見を統合することにより、「死生観」全体についての研究を一層進めることができるとと思われる。そこで本研究ではそのための基礎を成すため、①「死」という語からの連想語を収集し、これを分類することによって、我が国における死生観の構造を解明するとともに、②そこに示される発達に伴う差について検討することを目的とする。

II 方 法

(1) 被調査者

以下の2つの標本からの回答を得た。

第1標本：中学生・高校生269名（男105名、女159名、不明5名）、その家族382名（男133名、女232名、不明17名）⁴⁾。

第2標本：中学生・高校生232名（男84名、女146名、不明2名）。ただし、このうち23名は第1標本と重複している。

発達段階による差の検討に際しては、中学生を青年前期群（276名、平均年齢13.28歳、SD=0.98）、高校生を青年中期群（219名、平均年齢16.08歳、SD=0.88）、40歳以下の家族を青年後期-成人前期群（96名、19-40歳に分布、平均年齢35.17歳、SD=7.11）、41歳以上の家族を成人中期以降群（265名、41-71歳に分布、平均年齢45.47歳、SD=4.30）とした。

(2) 調査実施時期

第1標本は1996年7月、第2標本は2000年7月に調査を行った。

(3) 手続き

「死」から連想される語を問う設問（自由記述形式、回答は10個以内と指定）を含む質問紙調査を行った。実施に際しては、まずN大学教育学部附属中学校・高等学校に在籍する生徒に質問紙および調査への協力依頼を封筒に入れたもの3部（中学生・高校生用1部、家族用2部）を各クラス担当教諭を通して配付し、自宅に持ち帰り実施してもらった。家族用の質問紙は、「20歳以上の家族の方」に渡すよう生徒に指示した。回答された質問紙は元の封筒に入れ封をした後、再び学校へ持ってきてもらい、回収した。なお被調査者に対するネガティブな影響を極力避けるため、質問紙表紙の教示において、質問が「死」を主題としており、回答拒否ができる旨を明示した。

(4) 連想語の分類

2つの標本から得られた「死」から連想された反応語数は、同語を含めて4502語であった。反応数の分布を表3に示す。これらの語を、グループKJ法（川喜田、1986）を用いて分類した。分類は筆者を含む心理学専攻

4) この標本からの回答については、宮本（1983）に基づき分類したものを日本発達心理学会第9回大会（1998）で発表した。

表3 反応数の分布

反応数	人	%
1	74	8.4
2	114	12.9
3	135	15.3
4	100	11.3
5	119	13.5
6	76	8.6
7	73	8.3
8	34	3.9
9	19	2.2
10	139	15.7
平均=5.10, SD=2.88		

の4名（大学院博士課程前期課程在学1名、同後期課程在学1名、同後期課程満了2名）で行った。

III 結 果

(1) 死生観の構造

KJ法を用いて「死」から連想された反応語を分類し、以下のような死生観の構造を得た。各カテゴリの内容の概要を以下に述べる。なお、紙数の都合上、最下位のカテゴリの説明を部分的に省略した。見出しの斜体のカテゴリ名は、複数の下位のカテゴリから成る上位カテゴリであることを示す。

A. 死

①具体的な死の種類

- i) 死因：「自殺」「戦争」「事件・事故・災害」「病気」など、死を引き起こす外的・内的要因、およびそれらに関連した事柄に言及した反応。
- ・自殺：現実逃避に言及した反応や希死念慮を表明する反応、および自殺の種類や自殺する場所に言及した反応。
- ・戦争：戦争や戦場となった地名などに言及した反応、および原子力爆弾に関連した反応や戦争兵器に言及した反応。
- ・事件・事故・災害：殺人、事件、事故の種類や状況に言及した反応、犯罪の種類や犯罪から連想される裁判や刑罰に言及した反応、凶器・薬物などに言及した反応、および災害の種類や飢餓に関連した反応。
- ・病気：病名や病気の種類、症状などに言及した反応。
- ・死因に言及した死の種類：死因を特定して死に言及した反応。
- ii) 死ぬ過程：死ぬ過程の様相を特定して死に言及し

「死」からの連想語の KJ 法による分類

た反応。

②死の文化的側面

- i) 信仰：「神・仏」、「死後の世界」、「宗教儀式」、「迷信」、「靈魂」など、死者の鎮魂のための宗教儀式や、信仰から派生した事柄、俗信などに言及した反応。
 - ・神・仏：神仏の名称、および宗教的な説話・神話・俗信などに登場する神仏に準ずるものやその命に従うもの、精霊などに言及した反応。善悪の両方の立場を含む。
 - ・死後の世界：死後の世界そのものや、それに関連する場所に言及する反応、および臨死体験に関する反応。(ただし、輪廻転生に関する反応や死後の世界への移行に言及した反応は含めない。)
 - ・宗教儀式：死者の供養に関連する儀式、それを司る人や組織、それに関連する場所、および葬儀において見かけられるアイテムに言及した反応。死者の体について、敬意をこめて表現したり、宗教儀式で使用する呼び方で表現した反応。
 - ・迷信：(宗教的ではない)幽霊や化け物に関する言及、呪術に関する反応、終末思想に関する反応。
 - ・宗教からの連想語：宗教や宗派そのものの言及、および(上記のカテゴリに該当しない)宗教と関連の深い事柄に言及した反応。
 - ・肉体と魂：肉体と魂を対にして言及した反応。
 - ・靈魂：靈魂に言及した反応。

- ii) 芸術作品・フィクションなど：演劇、映画、文学、詩、歌など、様々な分野の作品やその登場人物、作者などに言及した反応。

- iii) 名言・格言：死に関する名言・格言、もしくは死という語を含む名言・格言に言及した反応。

③死に対する態度

- i) 死の評価：「性質の主観的な評価」、「死の軽視」など、死に対する評価や信念に言及した反応。
 - ・性質の主観的な評価：死の残酷さ、悲劇性、無常感、あっけなさやはかなさ、突然さなど、主観的に死のもつ性質に言及した反応。
 - ・死の軽視：死を安易にイメージしたり、実感のなさや自分との無関係さを記述したりするなど、死を軽視した反応。
- ii) 感情反応：「ポジティブな感情反応」、「ネガティブな感情反応」など、死に関連してわき上がる感情に言及した反応。
 - ・ポジティブな感情反応：死がもたらす安らぎ、希望や幸福などのポジティブな感情に言及した反応。
 - ・ネガティブな感情反応：死に対する恐怖や嫌悪、

悲嘆、苦痛に言及した反応や、死がもたらす衝撃や無力感、孤独感、空しさに言及した反応、死を回避したい気持ちの表明などの、ネガティブな感情に言及した反応。

- iii) 覚悟・決断：覚悟や決断に言及した反応。

- iv) 迷い：迷いに言及した反応。

④関係の中でおこりうる死

- i) 身近な関係の中の死：「死者への想い」、「残された者」、「身近な対象」、「遺された物の処理」など、自分が死んだ場合に残される周囲の人、もしくは周囲の人が死亡して残される自分、といった、身近な関係の中で発生する死やそれに関連した事柄に言及した反応。

- ・死者への想い：故人に対するねぎらいの言葉や故人への思い、思い出に言及した反応。

- ・残された者：死別により残される人々への言及、遺族に対する共感・配慮・懸念に言及した反応。

- ・身近な対象：自分の身近な人やペット、もしくはその死に言及した反応。

- ・遺された物の処理：遺産、金銭、保険、遺言、身辺整理などの事後処理に言及した反応。

- ii) 身近でない死：「弱者」、「有名人の死」など、第三者の死、および死に近い位置にいる他者に言及した反応。

- ・弱者：老いに関連する事柄や、高齢者、社会的弱者に言及した反応。

- ・有名人の死：著名人の死や、その死の状況が特殊(もしくは印象的)であった有名人に言及した反応。

- ・報道：マスメディアやその番組に言及した反応。

⑤死のイメージ

- i) 死の比喩表現：「別れ」、「消滅」、「自然への同化」、「停止」、「終わりと始まり」、「解放」、「眠り」など、死の性質や意味などを比喩的に表現した反応。

- ・別れ：別れに言及した反応、および死別により会えなくなることに言及した反応。

- ・消滅：身体、存在、自己などの消滅や、存在がないことに言及した反応。

- ・自然への同化：自然そのものや、その事物・現象に言及した反応、および自然への同化に言及した反応。

- ・停止：終わりや停止に言及した反応、および時間の停止、医学的な観点から身体諸機能の停止に言及した反応。

- ・終わりと始まり：死後の世界への移行や輪廻転生や旅に言及した反応、誕生や再生、新たな人生に言及した反応、始まり、および終わりと始まりを

対にして言及した反応。なお、輪廻転生した世界への言及を含む。

- ・解放：死による解放に言及した反応。
 - ・飛ぶ：飛ぶことに言及した反応。
 - ・眠り：眠りに言及した反応。
- ii) 死の形容：「静寂」、「暗黒イメージ」、「静的」、「清」、「光」、「無」、「冷たい」、「美」、「色」などの、死を形容するイメージに言及した反応。
- ・静寂：静寂さや沈黙に言及した反応。
 - ・暗黒イメージ：暗さや闇などのイメージに言及した反応。
 - ・静的：静的な状態や活動がない状態に言及した反応。
 - ・清：清らかさや透明なイメージに言及した反応。
 - ・光：光り輝くイメージに言及した反応。
 - ・無：無の状態や空虚の状態に言及した反応。
 - ・冷たい：冷たさに言及した反応。
 - ・美：美しさに言及した反応。
 - ・色：色彩としてのイメージに言及した反応。

⑥客観的な性質：死の客観的な性質に言及した反応。

- ・現実：死の現実性に言及した反応。
- ・自然の摂理：自然の摂理としての側面に言及した反応。
- ・不可避：死の不可避性・普遍性、宿命としての側面に言及した反応。

⑦その他（死）

- i) 「死」の言い換え：「死」を宗教的な言葉や中立的な言葉で言い換えた反応。
- ii) 死体：身体部位、死体の種類やその様相に言及した反応、および時間の経過にともない起こる死体の変化に言及した反応。
- iii) 病院：病院やそれに関連する事柄に言及した反応。
- iv) 死を勧める言葉：他者に対して死を勧める（もしくは命づける）言葉。
- v) 無意味な死：無意味な死に方を表した反応。
- vi) 自然破壊：自然破壊に言及した反応。
- vii) 死者：「死者」そのもののみに言及した反応。

B. 生

①生きる

- i) 連續性：時間の連續性、文化的な連續性、および血縁的に連続する関係に言及した反応。
- ii) 生命：多様な生物に言及した反応、命、生、人生、健康に言及した反応、および生と死を対にして言及した反応。
- iii) QOL：安楽死や尊厳死、および告知などの、タミナルケアや命の尊厳といったQuality of Life

(QOL) に関する事柄に言及した反応。

- iv) 生き方：今までの生き方に対する反省や今後の生き方に言及した反応、生きがい、努力、目標、充実に言及した反応。
- v) 脳死・臓器移植問題：脳死・植物状態に言及した反応、移植などのための身体の提供に言及した反応、および医学的に定義される死に対する疑問を表明した反応。

②生と死についての思索：生や死そのものに関する、抽象的な思考としての疑問の提示、およびその理解不可能性へ言及した反応。

C. その他

- ・欲：人間の欲望に言及した反応。
- ・死生観：「死生観」の反応。
- ・世界：「世界」の反応。

D. 分類不能：カテゴリーを成すことができなかった反応、複数の意味に解釈されるため分類できなかった反応、分類するべきカテゴリーが判定者間で一致しなかった反応、など。

なお、各カテゴリーの概要の説明に従い連想された反応語を分類することが可能であるか、ということを検討した。まず、175名（約20%）の被調査者を無作為に選び出した。そしてその反応語（901語）について、グループKJ法には参加していない心理学専攻の大学院生（博士課程前期課程在学）が、カテゴリーの概要の説明に基づき分類評定を行なった。評定に際しては、上記の階層構造を成すカテゴリーのうち、ここで取り上げた65カテゴリー（例えば、『具体的な死の種類』のカテゴリーに対しては、『自殺』、『戦争』、『事件・事故・災害』、『病気』、『死因に言及した死の種類』、『死ぬ過程』の6カテゴリーとなる。以下、『死の文化的側面』の9カテゴリー、『死に対する態度』の6カテゴリー、『関係の中でおこりうる死』の7カテゴリー、『死のイメージ』の17カテゴリー、『客観的な性質』の3カテゴリー、『その他（死）』の7カテゴリー、『生きる』の5カテゴリー、『生と死についての思索』の1カテゴリー、『その他』の3カテゴリー、『分類不能』の1カテゴリー）に分類してもらった。その結果、731語が当該のカテゴリーに分類された。そこで各カテゴリーの概要の説明を一部修正し、再度評定してもらったところ、最終的に806語（89.5%）が当該カテゴリーに分類された。この評定は、『具体的な死の種類』、『死の文化的側面』、『死に対する態度』、『関係の中でおこりうる死』、『死のイメージ』、『客観的な性質』、『その他（死）』、『生きる』、『生と死についての思索』、『その他』、『分類不能』という上位の11カテゴリーに対しては、93.1%が当該カテゴリーに分類され

「死」からの連想語の KJ 法による分類

表 4 各カテゴリの語の反応産出者の割合 (%)

死	97.6	具体的な死の種類	40.2	死因	自殺	18.8	
					戦争	7.0	
				死因に言及した死の種類	事件・事故・災害	26.4	
					死因に言及した死の種類	4.6	
		死の文化的侧面	49.5	死ぬ過程	病気	18.8	
					神・仏	7.2	
					死後の世界	19.8	
					宗教儀式	30.4	
					迷信	4.3	
					宗教からの連想語	2.6	
生	36.4	死に対する態度	45.1	芸術作品・フィクションなど	靈魂	6.3	
					肉体と魂	0.2	
				名言・格言	性質の主観的な評価	5.3	
					死の軽視	1.2	
		関係の中でおこりうる死	19.3	感情反応	ポジティブな感情反応	4.9	
					ネガティブな感情反応	40.1	
				覚悟・決断	死者への想い	3.1	
					残された者	2.9	
				迷い	身近な対象	8.5	
					遺された物の処理	3.9	
その他	2.2	死のイメージ	45.9	身近な関係の中の死	弱者	3.7	
					有名人の死	0.6	
					報道	0.2	
				死の比喩表現	別れ	11.0	
					消滅	6.3	
					自然への同化	4.4	
		その死(死)	16.6		停止	10.3	
					終わりと始まり	10.0	
					解放	3.5	
					眠り	2.5	
分類不能	11.0	死の形容	18.2	死の形容	飛ぶ	0.5	
					暗黒イメージ	5.7	
					静的	0.7	
					静寂	1.2	
					清	0.5	
					光	0.3	
		生きる	34.1		無	9.1	
					冷たい	1.5	
					美	0.3	
					色	3.5	
		生と死についての思索	3.2	現実	0.7		
				自然の摂理	0.9		
				不可避	4.0		
				「死」の言い換え	3.2		
		その死(死)	16.6	死体	7.6		
				病院	6.6		
				死を勧める言葉	0.1		
				無意味な死	0.2		
				自然破壊	0.1		
				死者	0.8		
		生きる	34.1	連續性	4.2		
				生命	19.5		
				QOL	11.0		
				生き方	2.9		
				脳死・臓器移植問題	5.0		

注) N=883名。斜体のカテゴリ名は、複数の下位カテゴリから成る上位カテゴリであることを示す。

た。

(2) 全体および年齢群別での連想語の産出傾向

被調査者全体では、産出された反応数の平均は5.10個($SD=2.88$)であった。年齢群別での平均反応産出数は、青年前期群で4.84個、青年中期群で5.08個、青年後期－成人前期群で4.74個、成人中期以降群で5.61個であった。年齢群による分散分析を行ったところ、有意な主効果が示された($F=4.04, p<.01$)。Tukey法による下位検定の結果、青年後期－成人前期群よりも成人中期以降群は有意に多くの反応語を産出したことが示された。

次に、各カテゴリについて、そのカテゴリの語を1個以上産出した被調査者の割合を表4に示す。被調査者の約40-50%が「具体的な死の種類」、「死の文化的側面」、「死に対する態度」、「死のイメージ」カテゴリの反応を、全体の約1/3の被調査者が「生」のカテゴリに属する反応を産出した。

また、「死」、「生」それぞれの主なカテゴリについて、年齢と反応産出の関連を検討した。すなわち「死」については、「具体的な死の種類」、「死の文化的側面」、「死に対する態度」、「死のイメージ」、「客観的な性質」の6カテゴリ、「生」については、「生きる」、「生と死についての思索」の2カテゴリについて、年齢群ごとに反応産出者数／非産出者数を算出し、両者の関連について χ^2 検定を行った(ただし、『生と死についての思索』カテゴリについては期待度数が5以下のセルがあったため、 χ^2 検定の結果を参照しなかった)。検定の結果、「関係の中でおこりうる死」($\chi^2=33.25, p<.001$)、「死のイメージ」($\chi^2=23.82, p<.001$)、「客観的な性質」($\chi^2=8.85, p<.05$)、「生きる」($\chi^2=22.80, p<.001$)のカテゴリについて、反応産出者数／非産出者数と年齢群の間での有意な偏りが示された。残差分析の結果、「関係の中でおこりうる死」、「死のイメージ」、「生きる」のカテゴリにおいて青年前期群はそのカテゴリの反応産出者が有意に少なく、成人中期以降群ではそれが有意に多かった。また、「客観的な性質」カテゴリについては、成人中期以降群においてそのカテゴリの反応産出者が有意に多かった。上記の8カテゴリについて、年齢群別での反応産出者の割合を図1・図2に示す。

さらに、上記の主な「死」の6カテゴリ、「生」の2カテゴリ、およびこれらをあわせた8カテゴリのうち、いくつのカテゴリにわたって反応を産出したかという反応産出カテゴリ数を、年齢群別に算出した(表5)。分散分析の結果、いずれについても年齢群による有意な主効果が示された。Tukey法による下位検定の結果、「死」

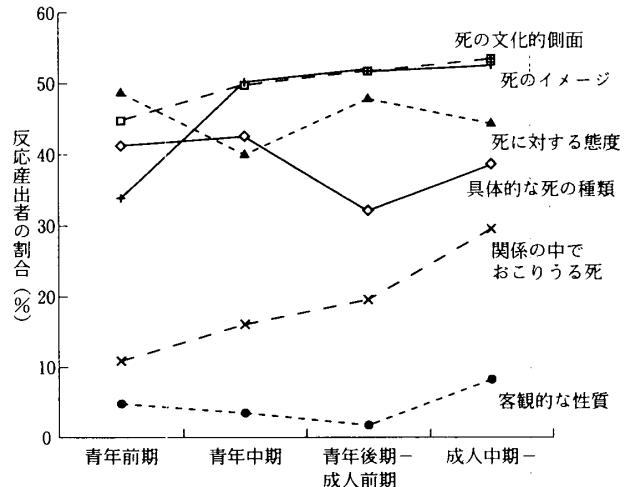


図1 「死」の主なカテゴリの反応産出者の割合
(年齢群別)

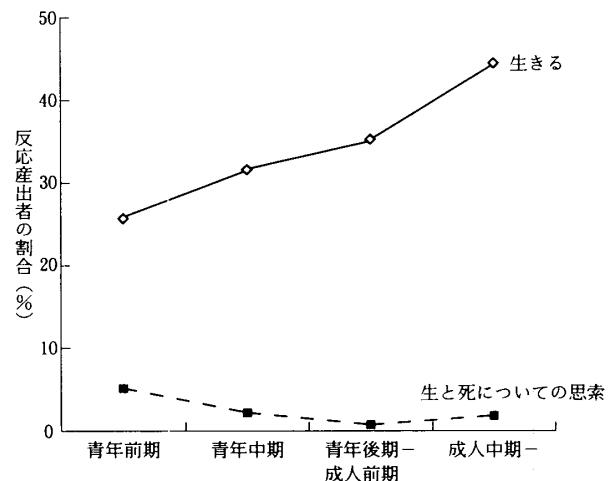


図2 「生」の主なカテゴリの反応産出者の割合
(年齢群別)

表5 年齢群別での反応産出カテゴリ数

	死	生	全 体
青 年 前 期	1.86	0.31	2.17
青 年 中 期	2.03	0.35	2.38
青 年 後 期－成 人 前 期	2.06	0.36	2.43
成 人 中 期 以 降	2.29	0.47	2.76
<i>F</i> 値	7.49***	5.02**	10.82***

注) 「死」は6カテゴリ、「生」は2カテゴリ、「全 体」は両者合計8カテゴリ中での平均反応産出カテゴリ数を示す。 ** $p<.01$ *** $p<.001$

と「生」については、青年前期群よりも成人中期以降群が有意に多くのカテゴリにわたって反応を産出していた。そして、これらをあわせた全体(8カテゴリ)については、成人中期以降群は他の3群よりも有意に多くのカテゴリにわたって反応を産出していた。

IV 考 察

(1) 死生観の構造について

「死」からの連想語の分類により得られた、死生観を構成する主なカテゴリについて検討していく。まず、事件・事故・災害や病気などの、人間の死因となる事柄に言及した「死因」カテゴリなどから成る、死という事象そのものに具体的に言及した「具体的な死の種類」カテゴリの反応が、被調査者の約4割から産出された。すなわち、人が死について考える際には、現実に起こる死そのものが想起されやすいといえる。そして、その中でも「事件・事故・災害」に関する連想が多く、これに次いで「自殺」や「病気」が多くの人によって連想された。すなわち、現実に起こる死そのものの中でも、外的な原因によるものが内的な原因によるものよりもしばしば連想されたのである。これに対して、平成13年の人口動態統計（厚生労働省大臣官房統計情報部、2002）によると、交通事故や（不慮の）窒息、転倒・転落、水の事故といった「不慮の事故」を原因とする死は死亡総数の4.1%、「自殺」は3.0%、「他殺」は0.1%を占めるのみである。むしろ「悪性新生物（31.0%）」「心疾患（15.3%）」「脳血管疾患（13.6%）」「肺炎（8.8%）」という4大死因で死亡総数の約7割を占めている。すなわち、実際の死因としては圧倒的に内的な原因によるものが多いにもかかわらず、連想語としては「事件・事故・災害」や「自殺」といった、外的な原因が産出されやすかったといえる。この結果は、我々が日常生活において接する「死」が、内的な原因のものである場合よりも、むしろメディアを通して報道される事故や事件の犠牲者のものである場合が圧倒的に多いということを反映しているのかもしれない。また、それと同時に身近な他者との死別を体験した際の悲嘆の解消の研究に示されているように、予期されていなかった突然の死や暴力的な死、自殺による死が残された人に与える心理的な衝撃の強さを表しているものとも解釈できる。

宗教儀式や、多様な宗教や民間伝承に関連する死後の世界、神・仏など、死者の鎮魂のための儀式や信仰から派生した事柄に言及した「信仰」カテゴリ、および印象的な死が含まれている芸術作品、名言・格言への言及などから成る、文化に根ざした「死」の連想である「死の文化的側面」カテゴリに言及した人は、全体の約半数と比較的多かった。しかし、やまだ・加藤（1998）は「あの世」に関するイメージ画と他界観の関連の検討をし、「他界の存在を信じるか否かにかかわらず、イメージ画は描けるし、絵の質に違いがない」ことを確認している。これを前提とすると、本研究の結果は、被調査者が各種

の宗教儀式に従事している（もしくは参加したことがある）か否かといったことや、神仏や死後の世界や靈魂などの存在に対する信念を持っているか否かということを反映しているというよりはむしろ、文化的な産物としてのこれらが我々の中に共通して持たれており、死生観を構成する要素として欠くことのできないものであるということを反映していると解釈できよう。

死の性質の主観的な評価や死の軽視に言及した「死の評価」カテゴリや、死に関連してわき上がる肯定的・否定的な感情に言及した「感情反応」カテゴリなどから成る、死に対する主観的な態度を表す「死に対する態度」カテゴリに言及した人は、45.1%と比較的多かった。このカテゴリへの言及はネガティブな感情反応を中心としているものの、ポジティブな感情反応も示されていた。さらに、このカテゴリの反応には、自己の死を前提としていると思しき反応と、他者の死に対する反応の両者が含まれていた。これらのことは、死に対する態度の研究に際して、否定的な態度のみに焦点づけるのではなく、肯定的な態度についても目を向けることの必要性、および「一人称の死」、「二人称の死」、「三人称の死」といった死の人称に注目することの必要性を傍証しているといえよう。

死んでしまった人への想いや、残された人々に対する配慮、死が大きな衝撃となるであろう身近な対象といった、二人称の死やそれに関連した事柄に言及した「身近な関係の中の死」カテゴリ、および弱者、有名人の死といった、三人称の死に関連した事柄に言及した「身近でない死」カテゴリなどの、死を他者との関わりという観点から連想した「関係の中でおこりうる死」カテゴリに言及した人は、全体の約2割であった。この中では特に、実際に死んでしまったと思しき身近な人や、死んでほしくない身近な人、自己の死を前提とした場合にこの世に残すことが気掛かりな人、などに言及した反応が多かった。接触頻度からいえば圧倒的に多いはずのメディアの中の死に対する言及は、非常に少数であった。このことから、毎日のように多様な形で報道されている三人称の死は、仮に一時的な印象が強かったとしても、個別の記憶としては想起されにくくと解釈できる。これらの死の人称に関連した結果は、上述の「死に対する態度」カテゴリへの反応とも共通するといえよう。

死を比喩的に、死別という側面や、個体の生命や人生の終末地点という側面、（そういった終末地点ではなく）一種の通過点としての側面などに焦点づけて表した「死の比喩表現」カテゴリ、および死を色彩や、無、暗黒イメージなどで表した「死の形容」カテゴリなどの連想である「死のイメージ」カテゴリに言及した人は、45.9%

と比較的多かった。死という事象が起こった場合（もしくは自己の死を想定した場合）に人はそれに対して様々な形で意味付けをし、理解しようとする。これらの反応は、そういった際の様々な視点を表しているものと思われる。また、「死の形容」としては死に対する「感情反応」と同様に、肯定的・否定的の両面の反応が示されていた。

死の自然の摂理としての側面や、その不可避性といった、死という事象が持つ「客観的な性質」に言及した反応は被調査者の5.5%と少数であった。子どもを対象とした研究において、通常「死」という概念の理解の指標として、死の普遍性や不可避性、非可逆性の認識が用いられている。それにもかかわらず、こういった客観的な性質は「死」という言葉から連想されることは相対的に少ないということが示された。すなわち、仲村（1994）やNoppe & Noppe（1997）にも示されているように、死の概念の理解が成立した年代の人であっても「死」を思い浮かべる場合には、客観的な事象としてではなく、様々な意味、価値、態度、信念などを付与した形で想起がなされるのであろう。

その他にも「死」を別の語で言い換えた反応、「死体」に言及した反応、「病院」に言及した反応などがみられた。「病院」に関する反応は、現代の我が国では自宅で死を迎えるよりは病院の中で死を迎えることの方が圧倒的に多いことを反映している面もあるものと思われる。

一方、「死」という言葉からの連想語として、被調査者の約1%が「生きる」カテゴリに言及した。このカテゴリには、Lifton（1970／1974）のいうところの象徴的不死性の様式に部分的に関連する時間的・文化的・血縁的な「連続性」のカテゴリ、多様な種類の生物、命、生などの「生命」カテゴリ、死に臨んだ末期的な状態でのターミナルケアや命の尊厳などの「QOL」カテゴリ、生き方への反省、生きがい、目標などに言及した「生き方」カテゴリ、脳死・植物状態、移植のための身体の提供などに言及した「脳死・臓器移植問題」カテゴリなどが含まれた。これらは「死生観」という語に示されるように、「死」というものについて思索をめぐらすと、必然的に「生」という問題を扱わざるを得なくなる、ということを表しているといえよう。

また、非常に少数ではあるが、死そのものや死後への疑問、生への疑問などに言及した「生と死についての思索」カテゴリの反応が示された。何人も死を自身のものとして体験することはできないのであり、それ故に死は謎であり、人は死について思索を行なう。その結果人は死に何らかの意味や仮の解答を見出し、何らかの態度や信念を抱くようになる。そのため、思索途中のような反

応があまり多くの人からは産出されなかつたのかもしれない。

なお、本研究において得られた死生観の構造は上述の先行研究で示された内容と比較すると、類似した部分もあるものの差異点も多い。特に、カテゴリ数が多く、かつ構造が複雑であるといえよう。こうした差異点は手法の違いおよび調査対象の違いに由来すると思われる。すなわち、本研究においては個々の反応語という非常に小さい単位の分類を行なったことに加えて、被調査者から複数の反応語を得たということ、さらに被調査者の年齢幅が広かったため抽象的な反応を含む多様な反応が得られたといったことが利点として働いたものと思われる。

(2) 「死」からの連想語の発達的变化

次に、「死」という語からの連想語について、年齢を指標とした発達的な観点から検討していく。まず、連想語の反応数および反応産出カテゴリ数は成人中期以降群が最も多かった。すなわち、年齢が上がると単に連想語数が増えるだけではなく、連想の領域も広がっているとみなせる。また、「関係の中でおこりうる死」、「死のイメージ」、「客観的な性質」、「生きる」のカテゴリについては、カテゴリへの反応産出の有無と年齢の関連が示され、成人中期以降群では反応産出者が有意に多かった。これらの結果は、若い世代と比較すると彼らがより現実的に「死」と関わりを持つ世代であるということに由来すると思われる。例えば、一般的に年齢が上がるにつれ、身近な他者との死別経験は多くなるし、自分に残された人生の時間は短くなる。身近な他者の死を受け入れ、やがて来る自己の死に備えるために、我々は「死」という主題に自分の中で取り組むことが必要になる。そこで蓄積されたものが本研究では「死」という語からの連想語として、「死のイメージ」や「客観的な性質」および「生きる」のカテゴリに表出されたのではないだろうか。堀（1998）は40-60歳の人を対象に行った調査から、「日常生活において老いや死を前向きに見つめようとする姿勢とこれらを客観的にとらえようとする姿勢とは、近い距離にあるようである」という結論を得ている。また、丹下・坪井・福川・新野・安藤・下方（2000）は成人中・後期の人の死に対する態度を検討した結果、「心理社会的に発達している人ほど生きるということに対して積極的でありながらも死に対して肯定的な見方をしている」と述べている。本研究の結果はこういった先行研究の知見と合致すると見なせるだろう。しかしながら、「死に対する態度」カテゴリに発達差が示されなかつた以上、その解釈は妥当ではないという反論が出るかもしれない。これについては、本論文では言及しなかった、より下位

「死」からの連想語の KJ 法による分類

のカテゴリにおける傾向、例えば「ゆっくりできる」、「安らぎ」といった「安楽」反応は若い世代では約2%であったのに対し、成人中期以降群は約7%であったということや、「恐ろしい」、「恐い」といった「恐怖」反応は青年前期群では約20%であったのに対し、他の3群は10%前後であった、といった部分での違いが指摘できる。すなわち、上位のカテゴリでは発達に伴う差は示されないが、連想そのものには某かの差が存在しているのである。これは死に対する態度の研究において、多次元的にその内容を把握することの重要性を示唆しているともいえよう。

さらに、「関係の中でおこりうる死」カテゴリについては、結果の部分では言及していないが、「身近な関係の中の死」に限定しても、若い世代では反応産出者が少なく、年長の世代では多いという同様の結果が得られていた。Diggory & Rothman (1961) によると、「自分の死が親族や友人に悲嘆をもたらすであろう」という懸念は、青年・成人世代を通じて、死の非常に「悪い」(もしくは『嫌な』)側面と捉えられているが、特に社会的な役割に対応する形で、年長の人々にとっては「自分を頼る者の面倒をみられなくなる」ということが、それに劣らず「悪い」(もしくは『嫌な』)側面とされている。すなわち、年長者では自己の死を想定した実際的な思考も増えているだろうし、自分より年上の親族がいれば、その人をより死に近い距離にいるとして思い浮かべるであろうし、過去に体験した様々な人の死が想起されることも年少者よりは多いであろう。その意味で成人中期以降群においてより多く身近な対象が想起されたと考えれば、妥当な結果とみなせるであろう。

逆に、「具体的な死の種類」や「死の文化的側面」カテゴリには発達に伴う差が示されなかった。しかし前者については、結果の部分では言及していない下位のカテゴリにおいて、「自殺」や「殺人」の反応は若い世代に多く、「病気」の反応は年長者に多いといった傾向は存在していた。つまり、全ての年代が同じような連想をしたわけではない(いずれも反応産出者の割合が相手より10ポイントほど高い)。けれども、既述の通り具体的な死につながるという点で各世代に共通して連想されやすい領域であったようである。また後者についても、下位のカテゴリである「迷信」の反応を年長者はほとんど産出していないが若い世代にその反応が示されたという違いはある。しかし、「信仰」カテゴリ全般としては世代を通してかなり共通した反応の仕方であった。金児(1997)は現代人の宗教観について、「狭義の宗教、目に見える宗教には否定的であるが、日本人の固有信仰としての民俗宗教性を堅持している」と述べている。さらに、

この民俗宗教性については大学生とその親の間の差があり、「風俗や年中行事としての軽い宗教との結びつきに親しみを感じ、自然にも敬虔な気持ちをもった宗教観」である加護観念は親の方が子どもよりもはるかに強いが、「死者への畏怖の感情、あるいは願いごとをかなえたり祟りや罰を与えるような人知を超えた存在に対する畏敬の念、あるいは輪廻転生を信じること、そうした観念の複合したもの」である靈魂観念は親の世代よりは子の世代、男性よりは女性において強いという結果を得ている。それにもかかわらず本研究で全体としては発達に伴う差が示されなかったということは、行動や信念の面においては発達に伴う差が存在するとしても、どの年代においても文化的に共通した要素が持たれており、連想語としてはそれが表出されたと解釈されよう。

(3) 終わりに

本研究では、「死」という語からの連想語を分類することにより、死生観の構造やその発達差の検討を行った。その結果、「死」という語からの連想語として「死」のみに関連するカテゴリだけでなく、「生」に関するカテゴリも見出された。さらに、各カテゴリに分類された連想語の産出の傾向には発達差の存在が示唆された。これらの結果は先行研究の知見を支持するものといえよう。また、連想語から構成された死生観の内容は、尺度評定法で検討されている領域と部分的に合致するものの、より広範囲を網羅したといえる。しかしながら、反応語としては個人の内部に蓄積された我が国に固有の文化的な要素を反映したと思しきものと、個人の態度、信念、経験、意味、価値などを反映したと思しきものが混在していたといえる。今後は尺度評定法による知見との関連を検討しつつ、死生観のカテゴリ間の関連を含めた全体的な構造およびその展開について解明することが必要であろう。

引用文献

- Collett, L., & Lester, D. 1969 The fear of death and the fear of dying. *The Journal of Psychology*, 72, 179-181.
- Diggory, J. C., & Rothman, D. Z. 1961 Values destroyed by death. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 63, 205-210.
- Durlak, J. A., & Kass, R. A. 1981-1982 Clarifying the measurement of death attitudes: A factor analytic evaluation of fifteen self-report death

原

著

- scales. *Omega: Journal of Death and Dying*, 12, 129-141.
- Florian, V., & Kravetz, S. 1983 Fear of personal death: Attribution, structure, and relation to religious belief. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 600-607.
- Gesser, G., Wong, P. T., & Reker, G. T. 1987-1988 Death attitudes across the life-span: The development and validation of the Death Attitude Profile (DAP). *Omega: Journal of Death and Dying*, 18, 113-128.
- Hoelter, J. W. 1979 Multidimensional treatment of fear of death. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 47, 996-999.
- Holcomb, L. E., Neimeyer, R. A., & Moore, M. K. 1993 Personal meanings of death: A content analysis of free-response narratives. *Death Studies*, 17, 299-318.
- 堀 薫夫 1998 中高年層の老いと死への意識の構造 大阪教育大学紀要 第IV部門 教育科学, 47, 153-164.
- 上薗恒太郎 1993 子どもの死の意識における感情表出 年齢と道徳教育 長崎大学教育学部教育科学研究報告, 45, 11-25.
- 金児暁嗣 1994 大学生とその両親の死の不安と死観 人文研究(大阪市立大学文学部紀要), 46, 537-564.
- 金児暁嗣 1997 日本人の宗教性—オカゲとタタリの社会心理学— 新曜社
- 河合千恵子・下仲順子・中里克治 1996 老年期における死に対する態度 老年社会科学, 17, 107-116.
- 川喜田二郎 1986 KJ法—渾沌をして語らしめる 中央公論社
- 厚生労働省大臣官房統計情報部 2002 平成13年人口動態統計(確定数)の概況
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei01/hyo4.html> 2002.9.14
- リフトン R. J. 小野泰博・吉松和哉(訳) 終りなき現代史の課題—死と不死のシンボル体験 1974 誠信書房
 (Lifton, R. J. 1970 *History and Human Survival: essays on the young and old, survivors and the dead, peace and war, and on contemporary psychohistory*. New York: Random House)
- 宮本一史 1983 現代の子どもは死をどう考えているか—死に対する感じ方・考え方— 稲村博・小川捷之(編)死の意識 共立出版 Pp.65-84.
- 仲村照子 1994 子どもの死の概念 発達心理学研究, 5, 61-71.
- Neimeyer, R. A., Fontana, D. J., & Gold, K. 1983 A manual for content analysis of death constructs. *Death Education*, 7, 299-320.
- Noppe, I. C., & Noppe, L. D. 1997 Evolving meanings of death during early, middle, and later adolescence. *Death Studies*, 21, 253-275.
- Sharma, S., Monsen, R. B., & Gary, B. 1996-1997 Comparison of attitudes toward death and dying among nursing majors and other college students. *Omega: Journal of Death and Dying*, 34, 219-232.
- 丹下智香子 1998 「死」から連想されるもの 日本発達心理学会第9回大会発表論文集, 321.
- 丹下智香子 1999 青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討 心理学研究, 70, 327-332.
- 丹下智香子 2002 「死」から連想されるもの(2)—KJ法による連想語の分類— 日本心理学会第66回大会発表論文集, 181.
- 丹下智香子・坪井さとみ・福川康之・新野直明・安藤富士子・下方浩史 2000 成人中・後期における死に対する態度(3)—エリクソン心理社会的段階目録検査(EPSI)との関連— 日本心理学会第64回大会発表論文集, 1015.
- Thorson, J. A., & Powell, F. C. 1993 Personality, death anxiety, and gender. *Bulletin of the Psychonomic Society*, 31, 589-590.
- Wenestam, C. G., & Wass, H. 1987 Swedish and U.S. children's thinking about death: A qualitative study and cross-cultural comparison. *Death Studies*, 11, 99-121.
- やまだようこ・加藤義信 1998 イメージ画にみる他界の表象—この世とあの世の位置関係— 京都大学教育学部紀要, 44, 86-111.

(2002年9月20日 受稿)

ABSTRACT

Categorization of the words associated with “death”.

Chikako TANGE

The purpose of this paper was to study the structure of the concept of “death”. Two hundred and seventy-six early adolescents (mean age 13.28 yrs), 219 middle adolescents (mean age 16.08 yrs), 96 late adolescents and young adults (mean age 35.17 yrs), and 265 middle and aged adults (mean age 45.47 yrs) were requested to list up to ten words associated with the word “death”. Four thousand five hundred and two words in total were collected and were categorized using the KJ method. The main categories were : (1) Actual kinds of death (e.g. internal and external causes of death), (2) Cultural aspects of death (e.g. religion, rituals, and art), (3) Attitude toward death (e.g. affection, and evaluation), (4) Death in relation with others (e.g. the dead, the bereaved, and precious ones), (5) Image of death (e.g. figurative expressions), (6) Objective nature of death (e.g. inevitability), (7) Life (e.g. lives, QOL, and organ donation), (8) Questions about life and death (e.g. ‘When should I die?’, and ‘Why do we live though we must die someday?’). Significantly less early adolescents responded in the categories of “Death in relations with others”, “Image of death”, and “Life”, while significantly more middle and aged adults responded in the categories of “Death in relations with others”, “Image of death”, “Objective nature of death”, and “Life”.

Key words: death, thanatology, word associations, KJ method, development.